

あとがき——テーゼとアンチテーゼ

山形辰史

私が高校生のころには社会科に倫理・社会という科目があつて、哲学や倫理学などの基礎を教わりました。教わつたなかにヘーゲルの弁証法という考え方がありました。私が理解したところによればそれは、歴史が動いていくについては、およそ以下のようなものごとが運ぶだろうということでした。まず既存の価値観なりやり方なりがあつてそれを「正」(テーゼ)と呼ぶ。あるときにこの既存のやり方に反対する考え方が出てきて、それを「反」(アンチテーゼ)と呼ぶ。そして正と反がぶつかり合つて両者の矛盾を克服するやり方として「合」(ジンテーゼ)が生まれる、というわけです。この合(ジンテーゼ)が次の段階では新しい正(テーゼ)となり、またあるときこれに対抗する反(アンチテーゼ)が現れて、再び両者を統合する合(ジンテーゼ)が生まれる、というふうに絶え間ない社会の変化が記述されます。習う前には「弁証法とはずいぶんいかめしい名前だな」と思いましたが、習つ

てみると何か当たり前のことに難しい名前をつけたように感じられたことを覚えていません。

やはり私が高校生のころ、新聞で「現在生産されている穀物のうちかなりの部分が家畜の飼料となり裕福な人がその家畜の肉を食べた。仮に現在生産されている穀物をすべて直接の人間の食料とするしたら世界のすべての人間を養うことができ、飢えは世界からなくなる」という記事を読みました（このことは本書の「開発は何のため？」にも書いてあります）。これを読んで高校生の私を感じたのは、「この方法で飢餓をなくすことができる」とわかっているのに、なぜこの方法が採られないのだろうか。わかっているのにできないのは、政治家が腐敗しているからなのだろうか」ということでした。高校生の私には、先進国の人間が肉を食べずに穀物だけを食べ、家畜の生育のために充てられていた穀物を発展途上国の人々に分け与えさえすれば、それだけで何も問題は残らないと思えたのです。

今にして思えば、この記事の主張は「先進国と途上国の間の分配の公正を重視せよ」ということで、「飢餓をなくすためには生産の拡大が必要だ」というテーゼに対するアンチテーゼになっていたのでしょうか。

途上国の開発にかかわる人々の間ではしばしばオルターナティブ (alternative) という

言葉が使われます。例えばオールターナティブ・テクノロジー、オールターナティブ・ツアー、オールターナティブ・トレードといったような使い方です。オールターナティブという言葉自体は「何か別の、代わりの」という意味をもちます。既存の開発のやり方でない何かを探しているのだ、という思いをこの言葉は表しているでしょう。オールターナティブという言葉はアンチテーゼという言葉と語感が似ています。

近年の開発に関する議論のいくつかはアンチテーゼと位置づけられると思います。開発は shouldn't、工業化は shouldn't、援助は shouldn't、政府は shouldn't、ダムは shouldn't。これらのアンチテーゼは、今やかなりの人々に支持を受ける多数派の意見になっているようにも思われます。しかし、これらのアンチテーゼが対抗しようとしたテーゼの意義は何だったのでしょうか。そもそも開発は何のために必要と考えられたのでしょうか。援助は、政府は、ダムはどうでしょうか。これらのテーゼを明確にしたうえで、そのテーゼにアンチテーゼをぶつけ、より高みにあるはずのジンテーゼを編み出したい、という希望のもとに私は本書を編集しました。テーゼがなんであったのかを確認することは、アンチテーゼを支持している人にとっても意味があるはずで、何と比較考量しているのかを明らかにすることによって、アンチテ

ーゼの意義も明確になるはずです。テーゼが何だったのかを掘り起こし、それに対応する形でアンチテーゼを位置づけ、読者とともにジンテーゼを考えるための礎とすることが本書のねらいです。

本書に収められた原稿のほとんどは、アジア経済研究所の発行する雑誌である『アジアワールド・トレンド』の創刊号（一九九五年四月号）から第二一号（一九九七年三月号）までに連載された「やさしい開発経済学」シリーズの原稿に加筆修正したものです。執筆者のすべてが、現在アジア経済研究所に勤務している、あるいは勤務したことのある若手研究者です。

連載「やさしい開発経済学」は、開発経済学および開発にかかわる経済学の主要な結論のエッセンスを、経済学を学んだことのない読者にも理解してもらいたいという精神からスタートしました。ここで対象としている読者は、通常私たちが書いている論文の読者とは違うのだ、ということを各執筆者に意識してもらうために、文章を「ですます」調に統一しました。自分たちが常日頃研究課題として考えていることがらを「ですます」調で日常会話的に書くことは、私たちが予想した以上に苦痛をとまなうことであります。やさしく書くためには、まず私たちが研究テーマとして取り組んでいることがらに本当に意味

のあることなのかを問い直すことから始めなければなりません。これは研究者としての存立基盤にかかわる大問題であり、連載が続いている間、毎月一日に翌々月の連載の第一稿が書き終えられた後、修正を要求する私と執筆者との間の議論は、しばしば口論にまで発展しました。本書に収められた一本一本の文章は、連載のために毎月繰り返された私と各執筆者のぶつかり合いの所産でもあります。

「やさしい開発経済学」の連載の開始、および本書の出版にあたり、アジア経済研究所内外の先輩諸氏から有益なご助言および励ましのお言葉をいただきました。特に横山久、鈴木徳衛のお二人のアジア経済研究所OBのご助言は、連載時の原稿構成を考えるに際し、大いに役立ちました。また所内の多くの方々に、「アジ研ワールド・トレンド」掲載前の文章を丁寧にお読みいただき有益なコメントをいただきました。山田勝久所長、野中耕一前理事、野原昂理事、林俊昭広報部長、岩佐佳英編集第一課長および「アジ研ワールド・トレンド」編集担当の新田淳一、児玉由佳(当時)、牧野久美子(当時)の三氏は、特に連載全体に目をとおしていただき、その都度その都度ご助言をいただきました。また、本書出版に際しては松原浩司氏、斉藤輝夫氏のお手を煩わせました。ここに名前を挙げることでできないほど多くのアジア経済研究所の職員の方々のご協力により本書が出版されよう

とされていることに、改めて深甚な感謝の意を表します。

本書は開発経済学の教科書ではありません。しかし最良の副読本になるように本書を編集しました。本当に開発経済学を勉強するためには経済学の基礎を学んだうえで開発経済学の教科書に進んでいただきたいと思います。私を含めアジア経済研究所の研究者が中心となって編集した教科書に、朽木昭文・野上裕生・山形辰史編『テキストブック 開発経済学』有斐閣、一九九七年があります。そのほかにも英語で書かれているものを含め多くの開発経済学の教科書があります。本書は、電車のなかで、旅先で、あるいは週末のつれづれに、手にしていただければ幸いです。

一九九七年九月